

二つの世界に生き、芸術家の矜持より、地球的な愛と至福を選んだ芸術家

——トマス・マンの『トニオ・クレーゲル』

Greatchain

July 25, 2025

これは私の六十数年前の、懐かしい私的な思い出話である。しかしこれはその頃の私に強い影響を与え、それが今日までつながっているので、心ある方々には読んでいただきたいと思っている。

長編ではないが中編小説というべき Tomas Mann の “Tonio Kröger”を、私は苦労して読んだ、あるいは読んだことにした。その頃、ノルマ外のドイツ語授業をやってくれる奇麗な先生がおられ、文法を教わったばかりで歯が立たなかつたが、数人の意欲ある友人と共に、何とかこのテキストを数ページは読んだと思う。しかしこれが動機となって、私は全編を曲りなりに読んだ。

そしてこの作品は、今に至るまで私をひそかに支配し続けている。青春真っただ中だった私は、一種の病気にかかった。これを「トニオ・クレーゲル病」と称して、後にどこかに書いた覚えがあるが、どこだったか全く覚えていない。しかしこの病気が、いわば切なさと喜びがまじりあうものとして、私という人間を形成することになった。

私が生涯、忘れことないドイツ語の切れっぱしとして、die zwei Namen in die Kissen hinein rufen というものがある。これは訳せば「二つの名前を枕の中へ呼び込む」ということだが、嫉妬の苦しさと、そこを超越した愛の喜びを同時に表現したものとして、稀有なものだと思う。嫉妬に苦しむときは、男性あるいは女性の一方を、床の中で叫ぶであろう。しかしトニオ・クレーゲルは、共通の友人である恋仲の2人の名を、寝床の中で泣きながら呼んだ。これは解説を必要としないだろう。

私が先日、「花嫁にむせぶ我あり老いて春」という、夢から得た俳句を紹介したとき、よく似た精神状態を私は経験していた。

以下、私はこの小説の最後のほぼ2ページを、試訳してみようと思う。ドイツ語はいつまでたってもむつかしい。それに、六十数年たって、初めて開いたこのテキストは、周囲が茶色に焼けて黄ばみ、かつての鉛筆の書き込みはほとんど読めない。しかし私は勇を鼓して翻訳しようと思う。この本がそれだけのものを、私に要求しているように思えるからである。文全体は、リザヴェータという女友達に宛てた、手紙のようになっている。

・・・・・・・・・・・

私は二つの世界の間に立っています。とはいっても国を追われているのでもなく、またそのために、少しでも苦しむわけではありません。あなた方芸術家は私を市民と呼び、そして市民たちは私を逮捕しようとします。… 私にはわからない、彼ら両側が、私の何を病氣だというのか？ 市民たちは鈍感です。しかしあなた方「美の崇拜者たち」は私を鈍重で、あこがれを知らない者と言っている。あなた方は考えてみるべきだ——この世界には、あまりにも深く、あまりにも根源的な、運命としての芸術家魂というものがあり、その者にとっては、どんなあこがれも、日常的な至福に比べれば、甘美でも、感性的価値を持つものでもないのです。

私は、誇り高き者に対しても、冷酷な者に対しても、偉大なる者の道を行き、悪魔的な美を探検し、「人間ども」を軽蔑する者たちに対しても、等しく驚嘆することができる。しかし私は、彼らを羨望はしません。なぜなら、もし少しでも「文士」から「詩人」作り出すことができるとなったら、それこそ、こうした私の、人間に対する、生き生きしたものに対する、日常性に対する、市民的愛なのです。すべての温かさ、すべての善なるもの、すべてのユーモアが、そこから発するのです。そして私には、それこそが、あの愛そのもの、書かれたものすべてがそこで成り立つ、愛そのものであるように思われるのです。この世界は、人間と天使がしゃべることができるよう、たとえそれはなくとも、鉱石（ラジオ？）が音を発し、鈴が響くようになっている——。

私のやったことに大した価値はなく、ほとんど無に等しいものです。私はもっと進歩するでしょう、リザヴェータ。これは約束です。私がこうして書いている間も、海の響きが向こうから聞こえきます。そして私は目を閉じます。私に見えてくるのは、まだ生まれていない、幻のような内部の世界で、このものが秩序を与えられ、形を与えられようとしています。影の塊のなかに人間の姿をしたものが見え、そのものが私にウインクして、それらを禁じたり開放したりせよと言っている。悲劇的なものと滑稽なもの、そういったものはよく似ており、私は非常に気に入っています。しかし私の最も深い、そして最も密かな愛は、あのブロンドの少女と青い目の青年 [Inge と Hans]、明るく生き生きした人々、幸福な人々、愛する価値のある人々、そして日常の人々に、属しています。

どうかこうしたした愛を責めないでください、リザヴェータ。それは善良で創造的なものです。そこにこそ憧れがありあり、重く苦しい嫉妬と、ほんのわずかな軽蔑があり、完全に汚れない祝福があるのです。
